

澁谷 鎮明*

Shizuaki SHIBUYA*



京釜鉄道発行「韓国京城全図」に描かれた旧韓末ソウルの景観

Landscape of Seoul in the Korean Empire Era depicted in the ‘Kankoku Keijo Zenzu’ published by Keihu Railway

I はじめに

1903（明治36）年に京釜鉄道株式会社が発行した「韓国京城全図」（図1）は、日本で作製された最も早い時期の近代的なソウル都市図である。この時期にはまだ日本による地形図（外邦図）が作製されていないだけでなく、近代測量もほとんど行われていない時期であった（澁谷、2010）。そのため当時は古地図など不十分な地理情報を利用した、簡略で不正確なソウル都市図が一般的であった。その中でこの「韓国京城全図」は、当時のソウル城内を中心とする領域をおおよそ正確に描き出すことに成功している。しかもその縮尺は1万分の1と大縮尺

かつ内容も詳細であり、それまでの縮尺を表示できない都市図に比して、飛躍的な進展がもたらされたと言ってよい。

この地図は韓国の嶺南大学校図書館、ソウル歴史博物館、日本の国会図書館など各地に保管されており、ある程度数が印刷されたものと思われる。本研究では国会図書館のものを用いるが、近年デジタルコレクションとして公開されている。公開された画像データを見ると地図が折りたたみ可能で、表紙がついていることが分かる。広げると105×75cmのサイズの一枚ものの地図になる（図1、2参照）。

また刊行時期が早いことから、そこから読み取れる朝鮮王朝末期のソウルに関する地理情報



図1（左）京釜鉄道株式会社「韓国京城全図」（1903年、国会図書館所蔵）

図2（右）京釜鉄道株式会社「韓国京城全図」（1903年、部分、南大門近辺、国会図書館所蔵）

* 中部大学国際関係学部国際学科

は貴重であり、検討する必要があると考える。1903年という時期は、韓国併合後に王朝時代のソウルが変化する以前の時期である。朝鮮時代末期の姿を残しつつ、日本も含む海外勢力が入り込み、次第に変化する時期とも言える。そのため、現在のソウルを見て一般的にイメージされる歴史景観とは異なる部分も見いだせる。そのような重要な資料であるが、これまでこの地図の内容については十分に検討されていない。韓国においては、このような日本人の手による朝鮮半島の都市図に関する検討は、2000年代に入って行われるようになったが、本稿のような個別の地図の検討などは、韓国においてもまだ十分ではなく、研究の余地があるように思われる。

本研究は、この時期の日本での朝鮮半島の地図作製の中での「韓国京城全図」の位置づけを行うとともに、そこに描かれている、現在われわれが持つソウルのイメージとはやや異なる朝鮮王朝末期の国都の姿についての考察を試みるものである。

2. 日本で作製されたソウル都市図

朝鮮半島においては、旧韓末より植民地期にかけて、多くの都市図が作成された。これらの地図は次第に測量に基づいて作られた「近代的」な地図に変化し、盛り込まれる内容が増加しその種類も多彩になる。この時期の都市図は日本人の手によって作成されたものも多い。

日本で見られた最も早い時期のソウル都市図は、朝鮮半島全図の割図として挿入されたソウル都市図であるだろう。管見の限りでは、この種の地図はおおよそ1890年代から1910年前後までに現れる。その内容はソウルを取り巻いていた城郭を模式的に円形で示し、その城郭に造られた城門が描かれ、城内の街路を簡略に線で示した、いわば略図に近いものであり、もりこまれた情報も少ない。このような描写方法は、

朝鮮王朝時代に作成されたソウルの古地図である各種の「都城図」に依拠している。例えば図3は、民間で刊行された朝鮮全図「朝鮮海陸全図」(1894年)中に割図として示された「京城之図」である。上述のように、古い都城図をベースとし、その情報の上に当時新たに作られた「日本公使館」や「英領事」などの情報が書き込まれている。

ソウル市立大学博物館編『近代地図特別展地の痕跡、地図の話』などによると、江華島事件および日朝修好条規以降、ソウル付近の現地踏査によって作られたものと思われる1880年代刊行の「朝鮮京城図」等の地図や(ソウル市立大学博物館、2004)、上述のように公式に入手した朝鮮時代の古地図の情報をもとに、1882年に「朝鮮京城図」が作製された(小林、2011)。これらの地図は精度や情報に問題があった。

表1は、1910年代頃までの日本や日本人が関わったと思われるソウル都市図のリストである。リストは筆者の確認できたものに限られており、他にも都市図が作成されている可能性がある。なおこの表にあげた都市図は、基本的に一枚物の地図である。これを見ても本稿で扱っている「韓国京城全図」は刊行時期が早いにもかかわらず、それまでのソウル都市図に比して質的な相違が見られ、ソウル都市図の転換点と言ってもよいだろう(澁谷、2018)。

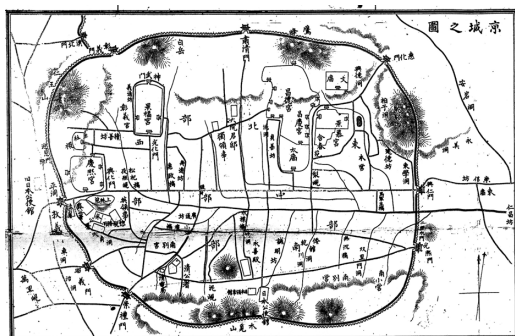


図3 「朝鮮海陸全図」(1894年)中の割図「京城之図」

地図名	発行年	著者・発行人	出版社・印刷所	縮尺	大きさ	所蔵機関
朝鮮都府略図	1876	勝田、益満		不明		アジア資料センター
朝鮮京城之略図	1882	水野、松岡、千原		約1:40000		国立公文書館
朝鮮京城之略図	1883					
漢城近方地図	1883					
京城之図	1880年代					国会図書館（日本）
京城付近之図・漢陽京城図	1900	不明		不明	26×34.7cm	ソウル歴史博物館
韓国京城全図 付 釜山日本居留地及大邱市街全図	1903	京釜鉄道株式会社		1:10000	97×68cm	国会図書館（日本）、岐阜大図、瀧南大博物館
最新京城全図	1907		日韓書房	1:10000	74.8×52.9cm	ソウル歴史博物館、高麗大博物館
京城（「新訂分道大韓帝国地図・京畿」中）	1908	玄公廉ほか	日韓印刷株式会社	不明		ソウル歴史博物館
京城市街全図 竜山市街全図	1909		青木嵩山堂	1:12000	26×37cm-48×46cm	国会図書館（日本）
京城市街全図	1907-1910	不明		8000分の1		国会図書館（日本）
京城市街全図	1910	財藤勝蔵	アルモ印刷合資会社	不明	108.8×115.5cm	ソウル歴史博物館
京城及び龍山（「朝鮮交通全図」中）	1910	大阪毎日新報社		不明		ソウル歴史博物館
京城龍山市街図	1911	朝鮮駐劄憲兵隊司令部		8000分の1		国会図書館（日本）
龍山合併京城市街全図	1911		明治屋京城支店	1:10000	78.2×54.7cm	ソウル歴史博物館
Keijo (Seoul)	1913	The Imperial Japanese Government Railways		1:32000	72.7×54.3cm	ソウル歴史博物館
KEIJO (SEOUL)	1913	Imperial Japanese Government Railways		1:32000		
京城市街境界図	1914	財藤勝蔵	十字屋	1:10000	104×73cm	国会図書館（日本）
京城市街境界図	1914	財藤勝蔵	十字屋	1:10000	109.4×77.5cm	ソウル歴史博物館
京城府明細新地図	1914		京城日報社	1:10000	109.5×80cm	ソウル歴史博物館、瀧南大博物館
昌徳宮全図	1915			3600分の1	31.9×45.5cm	瀧南大博物館
京城府管内図	1917			1:16000	78.4×54.3cm	ソウル歴史博物館
KEIJO	1910年代	朝鮮鉄道水テル		不明	38×52.6cm	ソウル歴史博物館

表1 日本人作製のソウル都市図一覧（1910年代以前に刊行のもの、ソウル歴史博物館『ソウル地図』、ソウル市立大博物館『土地の痕跡 地図の話』、および筆者の調査により作成）

3. 「韓国京城全図」に見る旧韓末の景観

(1) 「韓国京城全図」の概要

「韓国京城全図」を刊行した京釜鉄道株式会社は、朝鮮半島において当時京城から釜山に至る鉄道を運営していた株式会社で、当時の朝鮮政府がアメリカ人事業家のモーリスに売却した鉄道敷設権を基に、1901年に日本の実業家渋沢栄一らが設立している。

図1の地図の全体像を見ると、京釜鉄道の起点となる京城（ソウル）の図を中心に描き、割図として鉄道の通過地点である釜山市街図が左上に、大邱市街が右上に簡略に示される。縮尺は1万分の1で、割図の釜山、大邱の市街地地図は8千分の1となっている。また図4の奥付を見ると、発行日が明治36年5月3日であり、発行者は京釜鉄道株式会社となっている。さらにそれに並んで代表取締役として「澁澤栄一」の名が見える。

この地図は、それ以前の地図に見られたソウルの都城を楕円形に描く形態から、初めて山麓が正確に表現された、本格的な近代地図であると評価される（ソウル市立大学博物館、2004）。また地図中に等高線が用いられ、地物も詳細に描きこまれており、現代の地図と近く、何らかの方法で近代的測量が行われたものと考え

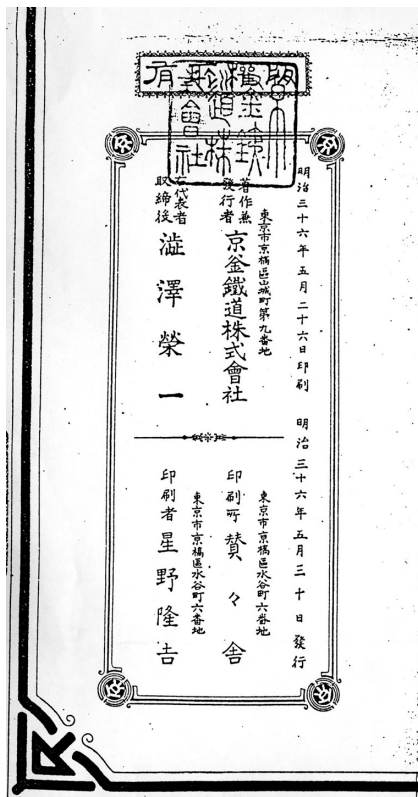


図4 「韓国京城全図」奥付

えられる。

朴賢洙は、この地図に描かれた内容について、(陸軍)参謀本部と鉄道会社の密接な関係を考慮するならば、参謀本部が日清戦争の頃より推し進めていた大縮尺朝鮮地図製作の結果があらわれたものと見るべきであるとの見解を示している(嶺南大学校博物館、1996)。なお『朝鮮鉄道史第一巻』を見ると京釜鉄道敷設について記されているが、その中で鉄道敷設予定地の地図「京釜鉄道水原烏山間予定線路平面図」が示される。地図作成の経緯ははっきりしないところが多いが、この図と地図のタッチ、特に等高線の描き方が似ていることから、鉄道敷設に際して行った測量と作図の延長線上にあるようにも思われる。

(2) 旧韓末ソウルの景観

「韓国京城全図」に描かれた旧韓末ソウルの姿を見ると、日本統治期の様々な変化が起こる以前の、朝鮮時代の国都の景観が伺えるのと同時に、1910年の韓国併合以前の、海外勢力がソウルに入り込んでいく様態をとらえることができる。地図全体を概観した後、図中のいくつかの部分に注目して見ていきたい。

図1に示される地図全体を見ると、それまでの都市図では難しかった周囲の山々をめぐるソウルの城郭が正確かつ明瞭に描かれる。図1中Aに示した城郭北東部の張り出し部分などは初めて正確に形態が把握されたのではないだろうか。その城壁が設けられたソウル城内を囲む山々も、その間隔はやや広目であるものの等高線で示される。また解放後、経済成長期に暗渠とされ、高架道路が作られ、2000年代に復元された城内の主たる河川である清溪川も当時の姿が描かれている。

しかしながら、城内に広がる当時の市街地部分に目をやると、思いのほか情報量が少ないことに気が付く。市街地部分は、入り組んだ街路

が詳細に描かれるものの、大縮尺の地図であるにも関わらず建築物があまり描かれていない。代わりに街路に囲まれた区画に「清公署」等の地物名称が示されるケースが多い。ある意味では「高低差や位置関係が正確なベースマップ」ができた印象である。

今少し地図を細かく見てゆきたい。図2中の南大門外には点線で示された「南大門停車場」が見えるが、これが現在のソウル駅の場所である。点線で描かれていることから、この地図は鉄道が未開通の状態を示したものと言えるだろう。なお、一部実線で描かれるのは1900年に開通した仁川に向かう京仁鉄道の路線が示されたものであろう。

南大門(図5中B)から景福宮(図5中E)に至るルートは日本統治期に「太平通」が作られ、現在ソウル旧城内の骨格となる「世宗大路」の一部となっているが、旧韓末にはまだこの道路が作られていない。

道があるはずの慶運宮周囲には、各国の公使館が見られる。後にこの一帯は京城府庁などが作られ、行政の中心になる。また本来のメインルートである南大門(図5中B)、鍾閣(C)、黄土岬(D)を経て、景福宮(E)に向かう道路には、「ピマッコル」と呼ばれる道路両側に細い街路が沿っていることが地図上で確認できる。これは身分の高い者がメインの道路を通過する際に、ひれ伏してその通過を待たねばならない庶民が身を隠すために利用する路地とされる。他方、測量が十分にできなかったためなのかもしれないが、景福宮後方や、現在の青瓦台(大統領府)付近は、重要な場所であるにもかかわらず情報量が少ないように見える。

(3) 南山北麓の日本人居住地

次に、伝統的な国都ソウルの姿ではなく、当時の新たな動きである城内の日本人の動きについて、地図を頼りに検討してみたい。図6は「韓

国京城全図」でソウル旧城内南部の南山北麓付近を示したものである。ここは、当時日本人が居住し始めた場所で、現在の明洞周辺である。図6中には、仏蘭西教堂（現・明洞聖堂）や清国公使館（現・中国大使館）等に交じり、日本公使館（図中ア）や本願寺（イ）、日本守備隊病院（ウ）、日本領事館（エ）、日本居留民役所（オ）、日本郵便電信局（カ）などの日本政府や

日本人に関連する施設が存在することが理解される。中でも複数の区画に「日本守備隊」と記されているのが目につく。このほか、三井物産会社支店（キ）、五十八銀行（ク）、第一銀行（ケ）等の企業名も見られる。

青井（2005）によれば、1900年前後は、「開市場」となった漢城（ソウル）において、日本人居留民会による南山開発が他の外国勢力との角逐の中で進められた時期である。青井作成の図7に示した1915年頃の日本人居留地の範囲や関連施設と、図6の「韓国京城全図」の内容を比較するならば、1910年の韓国併合を挟んで、日本領事館が初期の京城府庁として使用され、日本守備隊病院敷地が憲兵隊司令部となり、日本領事館に隣接した警察署が「南部警察署」となるなど、様々な施設を使いまわしながら、日本人居留地区が形成されてきたことが理解できる。他にも「韓国京城全図」に日本郵便電信局が示されるが、これは現在のソウル中央郵便局の位置とほぼ同じである。後に朝鮮銀行が道の反対側に作られていく場所でもある。現在われわれが見ている明洞周辺の景観はこの時期の動きに影響を受けているともいえるだろう。

また「韓国京城全図」中の日本公使館から日本居留民役所に至る明禮坊附近は、のちに「明治町」となり、現在の明洞の繁華街となっていく地域である。

4. まとめ

本研究では、1903年作成の「韓国京城全図」について、その位置づけについて明らかにするとともに、そこに描かれた旧韓末のソウルの景観について考察した。「韓国京城全図」は、それ以前の、古地図の情報や簡易な現地踏査を土台とした都市図とは一線を画した比較的正確な地図であった。ただ地形や街路は良くとらえられているものの、街路に囲まれた地物、建築物の形態については十分に記されないものが多い



図5 京釜鉄道株式会社「韓国京城全図」（1903年、部分、鍾路・景福宮近辺、国会図書館所蔵）



図6 京釜鉄道株式会社「韓国京城全図」(1903年、部分、南山北麓近辺、国会図書館所蔵)

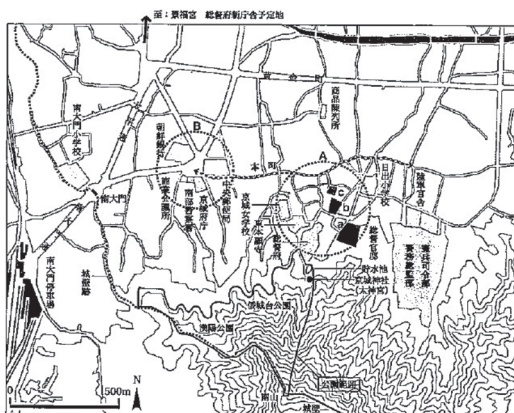


図7 1915年頃の日本人居留地の概略範囲 (青井、2005)
1915年測図地形図 (陸地測量部, 1917), 『京城府史』第二巻・第三巻 (京城府, 1940・41) に基づき作成。

- | | |
|------------------------|------------------|
| A 開市直後1885の日本人居留地の概略範囲 | a 旧公使館 (総督官邸に転用) |
| B 1890年代後半以降に形成された日本人街 | b 旧領事館位置 |
| | c 旧居留民総役場位置 |

く、「ベースマップ」ができた印象である。

しかしそこに描かれた情報は、当時を知るための貴重な地理情報である。この地図に記された情報は、韓国併合以前のソウルの状態を示すものであり、朝鮮王朝時代の面影を垣間見ることができる。さらには日本人居住地域の変化など、旧韓末から韓国併合に至る激変の時代をとらえることも可能である。この点については、作成時期の違う他地図の比較より明らかになる事柄も多く、日本統治期の地図の分析と合わせて、今後より詳細に検討したい。

【参考文献】

- 青井哲人 (2005) : 『植民地神社と帝国日本』、吉川弘文館
- 小林茂編 (2009) : 『近代日本の地図作製とアジア太平洋地域—「外邦図」へのアプローチ』、大阪大学出版会
- 渋谷鎮明 (2010) : 朝鮮半島における近代都市図作成の展開—朝鮮全図に掲載されたソウル都市図を中心に—、歴史地理学52-1、pp.87-104
- 渋谷鎮明 (2018) : 古地図と近代地図のはざま—明治期に日本で作製された朝鮮全図とソウル都市図—、アリーナ21号、pp.153-167
- ソウル市立大学博物館 (2004) : 『近代地図特別展 地の痕跡、地図の話』 (韓文)
- 朝鮮総督府鉄道局 (1929) : 『朝鮮鉄道史第一巻』 (国立国会図書館デジタルコレクション)